

新春座談会

もてなしの心でつくる 北海道百年の景観

幕末期、明治初期に日本を訪れた欧米人は、日本の風景を見て、まさしく「ガーデンアイランド」と慨嘆しています。しかし、日本の急激な近代化、戦災、高度成長期、その経済優先の無秩序な市街地・住居形成は、伝統的な都市、住居環境に大きな変化をもたらし、決して美的とはいえない多くの景観をも生み出しました。

私たちは、欧米の全体調和的な街並み、郊外住宅地、農村風景における集落としての統一感、重厚な家、家々の窓や庭、街道沿いに飾られた緑と花の景観への強いせん望とあこがれを持ち続けています。

地域の景観は、地理的条件や自然環境とともに、歴史、文化、個々の住民生活の規範としての住居、生産環境により形成されていきます。したがって、より良い景観を生み出すためには、行政のみならず、地域、住民、景観の専門家の積極的な関与と協働、そこに暮らす住民一人ひとりの自覚が不可欠です。

北海道では、平成11年に「北海道景観形成基本計画」を策定（現在は「北海道美しい景観のくにづくり基本計画」14年策定）、13年には「北海道美しい景観のく

にづくり条例」を制定、15年3月には「花大陸 Hokkaido」を宣言。また、道内では昭和62年の占冠村を嚆矢に景観条例を策定する市町村も多くなってきています。

一方、平成15年に国土交通省の「美しい国づくり政策大綱」が、16年にはわが国で初めて景観形成を総合的に進めるための景観法が制定され、また、17年度から「シーニックバイウェイ北海道」が本格的に制度運用され、翌18年度からは「日本風景街道」として全国展開なされるなど、景観形成にかかわる法律、制度の整備も進められてきています。

また、2008年には「ガーデンアイランド北海道2008」が北海道全域を舞台に展開され、7月には「北海道洞爺湖サミット」が開催されます。

今回の企画では、そうした状況を踏まえ、豊かな北海道の自然・景観を生かし、美しい環境を生み出すための方策、地域、市民レベル、また協働の取り組み・体制について、百年の継続に向けた課題と今後の展望を議論していただきます。



出席者

有山 忠男 氏

NPO法人ガーデンアイランド北海道理事・事務局長

かとう けいこ 氏

シーニックバイウェイ支援センター事務局長

高野 文彰 氏

高野ランドスケーププランニング(株)代表取締役

八木 波奈子 氏

(有)ビズ出版代表取締役・編集長

コーディネーター

小林 英嗣 氏

北海道大学大学院工学研究科教授

1 景観づくりの現状と課題

それぞれの原風景からの景観を

小林 景観を語り、考えるとき、原風景は大切な背景となりますので、まず皆さんの出身地を教えてくださいませんか。

有山 私は小樽です。中学まで小樽にいて、その後、親の転勤で室蘭、札幌、大学卒業後は東京に約10年いて、また北海道へ帰ってきました。

八木 小樽の稲穂小学校のすぐわきで生まれ、小学2年生のときに東京に出て、それからずっと東京です。

高野 生まれは中国の満州です。祖父母の代に乗り込んでいって、両親も向こうで生まれているのです。放浪癖みたいなものはそのへんから引き継いでいるのでしょう。終戦で引き揚げてきて山形県の米沢で高校まで過ごし、北海道大学卒業後は東京に3～4年、アメリカに5年、戻ってきてまた東京、17年前に北海道へ移ってきました。

かとう 足寄で生まれ、すぐ浦幌に。本別、幕別と十勝で高校生まで過ごし、それからずっと札幌です。

小林 私は長野県です。その後は東京経由で北海道に来ました。皆さんそれぞれ心に染み付いている原風景ってあるでしょう。小樽の人と十勝の人では違いますよね。そういう視点も意識して、これからの北海道の景観を語っていただきたいと思います。



皆さんが一番力を入れて取り組んでいることと現実とのギャップをご紹介ください。

発見はそこに暮らしていない人の目から

かとう シーニックバイウェイ支援センターの事務局長になって1年8カ月、今一番面白いときです。前職で北海道各地取材して回っていましたので、北海道の隅々を知っているつもりでしたが深さが違いますね。地域の人に案内されるたびに感動で声を上げるような景色に出会えて楽しい仕事だと思っています。

中景から遠景がシーニックバイウェイの魅力的な景観ですが、それを形成する国立公園などの自然、この手前には農家の人が作る畑があります。その景観を「守ろう」という意識を強く持たないと、維持することは「難しい」と感じています。

シーニックバイウェイは、札幌や東京、大阪、東ア



ジアなど他の地域の人たちにルートに来ていただき、地域の人と交流してもらうことが一番のねらいです。そのためには、まず美しい景色を見つけて守ることが大事なのです。

旅人にとっての「美しい景色」も、地域の方は「それほどでもない」と思うことが多いので、専門家と一緒に景観診断に行きます。また、例えばA町、B町、C町の人が同じバスでシーニックバイウェイのルートを走ると、隣の町のことでも驚いて、A町の良さをBとCの人が感動してAに伝えたりしているのです。必要なのは、そこに暮らしていない人の目だと思います。その感動を伝えることで、地域の方が自信を持つ瞬間を見た気がしました。

その感動はもしかすると一瞬かもしれないのですが、カラマツの林の黄金色、耕した土の黒、秋まき小麦のちょっと出た芽の緑、そういう風景がずっとつながっています。11月に視察でご案内した方が十勝の防風林を見て、「なんと素晴らしいんだろう」とおっしゃって、バスの中で「ここから見る景色いいよね」と盛り上がっていました。

ガーデニングから空間が広がり…

小林 八木さんの編集されている雑誌「BISES(ビズ)」を見ますと、ガーデニングの仕事を中心に据えながら、その先を広く考えている気がします。つまり、日常生活を延長・拡大していくと、地域が、北海道がこう変わるという強い思いを持ちながらやられているような気がします。

八木 私は15年ずっと「ビズ」を作り続けていますが、

その中で常に10年、50年、100年という数字を意識的に記事の中に入れてきました。これは長いスパンで私たちの住環境を変えていこうということですが、「住環境」という言葉は使ってはいなかったです。インテリアから入って21年目に、家の外の庭といわれるところも含めて自分たちの住まいにしようとして外に出て行った途端に、周りの目がそこに集中してきたということです。ガーデニングをすることで向こう三軒両隣ぐらいに空間が広がっていったあたりから、社会性、客観性みたいなものが生まれてきたのです。「ピズ」を始めてほんの2、3年で、これは世の中が変わるかもしれないと感じました。

明治神宮は100年前に人が木を植えて作った東京では大変貴重な深い森です。明治神宮の森が100年でできるのだから、私たちも頑張ろうというメッセージを最初のころは具体的に送りました。

5～7年目の1997年ごろ、ガーデニングがブームになり、花に興味のない人もトレンドということで入ってきましたが、ブームが去った後は純粋なガーデナーが残りました。植物を知る人はインテリジェンスの高い方々が多いような気がします。

自然をどう評価するかで、北海道の価値は変わる

小林 有山さんは国内外の事例を豊富に体験されていると思うのですが、北海道の景観の価値や可能性をどう考えていますか。

有山 いろいろな可能性を北海道は持っていますが、一番のベースは「自然」です。その自然をどう評価するかで、北海道の価値が変わってくると思います。北海道には本当の意味での原生林が豊富に残っていて、動植物がひとつの大きな生態系として存在しています。北海道に住んでいるとそれが当たり前だと思っていましたが、一歩外に出てみるとそれがすごい財産だということが歳をとるにつれて実感されます。また、もう一つの要素として、北海道の農村景観もちょうど北海道の自然のスケールとバランスが取れていて、非常に自然な形で景観に入ってくるという良さがあります。



自然のすばらしさが北海道の可能性ですから、それをどう引き出していくか。そのために、北海道がもっと一つになって、知恵を出し実践する場をつくろうというのが「ガーデンアイランド北海道」の発想の出発

点だったのです。スローフードや自然保護・環境保全など、環境系のいろんな動きが出てきたのも北海道のその分野での可能性が高い証拠だと思います。トヨタ関連企業の進出で2次産業発展の面でも北海道は大きな可能性を持つようになってきましたが、それも北海道の持つ雄大な大地とそういう環境がベースになっているといわれています。

もう一つは、これまで何十年も整備してきたインフラがようやくここで生きてきているという感じもします。北海道の景気や経済は一見悪そうですが、今までためてきたエネルギーを一気に噴出できるタイミングではないかと思っています。シーニックバイウェイやガーデンアイランドなどがこの時期に出てきたのは決して偶然ではないと思います。

ガーデンアイランド北海道のめざすもの



もう一つは、これまで何十年も整備してきたインフラがようやくここで生きてきているという感じもします。北海道の景気や経済は一見悪そうですが、今までためてきたエネルギーを一気に噴出できるタイミングではないかと思っています。シーニックバイウェイやガーデンアイランドなどがこの時期に出てきたのは決して偶然ではないと思います。

もう一つは、これまで何十年も整備してきたインフラがようやくここで生きてきているという感じもします。北海道の景気や経済は一見悪そうですが、今までためてきたエネルギーを一気に噴出できるタイミングではないかと思っています。シーニックバイウェイやガーデンアイランドなどがこの時期に出てきたのは決して偶然ではないと思います。

北海道には中に入って楽しめる森は意外と少ない

小林 明治の初めに世界的な旅行家のイザベラ・バードが米沢を「アルカディア(桃源郷)」と賞賛しました。高野さんはそういう米沢で幼い心を育み、全国、世界をご覧になってきました。イザベラはヨーロッパやアジアを見てきて彼女なりにそう評価したのです。高野さんも今のような仕事をされていて、世界を評価する基準を幾つかお持ちだと思いますが、北海道を眺めたときにここをこう変えたらもう少し評価が上がるのではないかと感じたところはありますか。

高野 米沢は山に囲まれた盆地で閉鎖型の景観ですが、本当にほっとするような風景です。十勝の平らで開放的な風景とは違うという感じがします。母を十勝に引き取ったときに、「山形から離れて寂しくないか」と聞いたら、「満州みたいで気持ちがいい」と言っていました。十勝に来たというのも、広大な平野に対す

るあこがれみたいなものが血の中に入っていたのかなという気がします。人間にはその両方へのあこがれがあります。閉鎖型の柔らかい環境は抱かれているようで落ち着いて居心地がいい。昔、風景の好みのテストをしたとき、高齢者はそういう風景を、広大な風景は若者が好むという結果が出たのを覚えています。北海道の風景の中でも、かなり閉ざされている形のところと平らで広大なところがいくつもあります。

私が今興味のあるのは森です。北海道にある森は遠景や中景として見る森で、中に入って楽しめる森は意外と少ないのです。もう少し手を入れて、使いやすく変化に富んだ、多様性のある森にしていくのが、今一番の課題というか、興味のあるところです。

デザインの指針が入れば農村景観はもっとよくなる

小林 高野さんは今やられている活動のフィールドと景観の美しさをクロスさせながら話をされましたが、その中に自然、森、農村、ガーデンは出てきましたが、「まち」は出てこないのですか？

高野 農村集落の景観には興味があります。建築家はまちに向かって仕事をしていますが、農村住宅のあり方、農村の納屋や倉庫、堆肥舎などは意外とデザインという話を抜きで動いています。ハウジングメーカーにもそういうのが大事だと思うし、農業関係の補助事業の基準にももう一步デザインのクオリティー（質）の指針が入れば、農村景観はもっとよくなります。景観の基盤になる畑の、防風林の、山の美しさはありますが、そこにある農村の1戸1戸がきれいかという、まだまだです。企業の努力、建築家の努力、行政の指導の努力が必要だと思います。

「地域の相場」が大事

小林 北海道のまちでは、人間のエゴやライフスタイルの主張があり過ぎて、善し悪しの区別がないまちづくりが行われているという議論をする人もいます。北関東や東北の人たちは、自分たちのまちを使うとき、家を造っていくときには「地域の相場」を大事にします。そうしないと、「あなたは相場崩している」と地域の人々が怒る。このような約束事を考え、道民で共有しようというのが、北海道の景観計画や景観条例だと思っております。

北海道は国の景観法ができる前に景観条例を作ったのに、全然稼働していないのが大きな問題です。理念的には、北海道には生の自然といういい素材があり、生業としての農業が日本のかなりのシェアを占めてい

る。そして計画的にまちをつくってきたはずですが、そういう図式で見ると、みんなが秩序をうまく意識すれば良くなるはずなのに、なんでそこに景観の問題が出てきているのか、その原因をみんなでどうやって解いていくのか、目標は何なのかが大事だと思います。

2 美しい北海道の百年の景観づくり

「エデン」なるものは何か

小林 そこで皆さんの経験を少し共通化していけば、北海道全体がガーデンアイランド化すると思います。ガーデンアイランドの「ガーデン」の字源は、ヘブライ語で「ガル・エデン (Gar Eden: ガードされた園)」です。北海道が世界やアジアの中でエデンとして守り、つくり、共通にしなければいけないもの。自然を、農村を利用して、また、まちをつくる時に意識しながら囲い込んでいくという、一番中心になる「エデン」と称すべきものは何なのでしょう。

八木 私がやってきたガーデンの世界から見ても、そういうものを求める、こうあってほしいという思いの強い人々が確実に育ってきています。

ひとつの例ですが、ビズの第3回ガーデン大賞でグランプリを取られた女性が北海道にいます。賞品で海外旅行へ行き、帰ってきて「私、すごくすてきな街路樹を見てきた」「自分たちの街にある街路樹はなぜあんな形に剪定されてしまうのか。自分が見てきた木はもっと伸びやかで美しかった」と言うのです。ガーデンを知る方は、そこに自分の居心地のいい街路樹があるまちかどうかをすごく気にするのです。同じ話が兵庫県でもあって、ガーデングループの女性が「この木の花が見たいのになんで花が咲く前に剪定するのか」と市に掛け合い、アカシア通りという名前の付いたとおりに花が見られるようになったそうです。

北海道で生まれつつあるガーデンは、千年の森もそうですが、大変ダイナミックです。プロの手による広大な観光ガーデンや、個人のやっているオープンガーデンに、ビズで15年間ずっと待っていた“海外だけの風景”のようなシーンが実現しています。全国のガーデナーたちのこうあるべしという基準が、「小さな家の周りにお花がたくさん咲いてかわいいわ」というレ



ベルではないことを認識していただければ、道外から北海道を目がけてやってくる人たちにどう向き合ったらいいのか分かるのではないのでしょうか。

かとうさんが先ほど防風林の幅や、芽吹き的美しさがずっと続く風景の話がされていましたが、日本の場合、20m同じシーンが続いたら拍手しなければいけないぐらいに景観が途切れてしまうのです。だから北海道はすごい。

いまガーデン界には、まるで草花が自然体で育っているかのように見せるデザインを好むガーデナーが多くなっています。

みんながワッと感動する自然というのは、まさに人の手によって造られた北海道の景観です。そういうものをよしとする人たちがガーデン愛好家にすごくいるのです。そういう意味で、大変可能性がある北海道ではないかと思っています。

小林 イングリッシュガーデンとって、イギリスが自然再生や庭づくりの先端だというふうに思っていますが、実は江戸末期の日本がいろんな影響を与えています。そしてイギリス人は全員庭師の様に活動を重ねることで、荒廃したイギリスを短期間で再生したのです。

皆さんの仕事や行動を通してながら育っている心を表に出して、みんな共通にしよう。それが自然的な目に見える資源に加えて、心の文化的な資源になる。北海道に行くと、かとうさんみたいに若い女性はみんな庭に興味があるとか、有山さんのように住むところをきちんと整えていく、再生していく、あるいは高野さんのようにというふうに。そういう人が増えてくるということを考えて、ものをつくりながらその波及効果みたいなもの、感動する何かをみんなに残そうとされているのではないかと思うのです。

森や自然と付き合いしていく文化

高野 北海道へ移ってきてから、森と触れ合うチャンスが圧倒的に増えました。森に行ってみると、開拓期の1時期は薪炭林として使われていた森も長い間放棄されていて、ササが背丈ぐらいある手の入っていない森で、これじゃ気持ち悪いというので、まずササ刈りを継続して間伐するのから始めました。あまり急激に環境を変えるとよくないので5年ぐらいで徐々にやっていると、林床に圧倒的に草花の生えるのが増えて、森の中を自由に歩けるよう



森が圧倒的に増えました。森に行ってみると、開拓期の1時期は薪炭林として使われていた森も長い間放棄されていて、ササが背丈ぐらいある手の入っていない森で、これじゃ気持ち悪い

になりました。ちょっと明るい森があったり、大木の周りにはちょっとした広場があったりというのをつくっていきけるというのがすごく面白くて、一般の人たちもそういう作業に参加することで、森とのやりとりを体で感じて元気になっていきけるのではないかと思いました。

私たちが今までやってきたのは足し算のデザインだったと思うのです。いろんなものをつくって、周りに木を持ってきて植えてと、それはそれで大事で必要なことと思うのですが、一方で引き算のデザインがすごく面白い。そこに潜在的に眠っている自然の営みの力をうまく導き出して、きれいな森をつくっていく。北海道には森はたくさんありますが、中に入って気持ちよく歩ける森は少ないのです。林道は通っていますが、周りはクマザサでクマがいつ出てくるか分からない。植林もいいのですが、一過性で森とのかかわりがなかなか毎年継続できないと思います。

北海道には里山の文化が形成される暇がなく、近代化に突入してしまったわけです。森との関係はおじいちゃんの代はもう開拓する相手でしかなかった。そういう意味では、じっくり時間をかけて森や自然と付き合い合っていく文化を形成していく時期によく差し掛かった感じが最近はしています。

小林 成長する過程の中での付き合い方と、これから成熟させていく付き合い方を意識的に変えていく必要があるのではないかと思います。

有山 イギリスの農村の景色は感動するぐらいきれいです。中に入ってみると、確かにそこにフットパスがあり、民宿があり、農村の中で楽しむ仕掛けが長い歴史の中でできているのです。写真を撮ったら北海道も同じような風景なのですが、森とか農村の中で暮らしたり楽しんだりという仕掛けとか、文化が北海道にはまだそんなに形成されていないので、景観だけを比較して即どうのという話にはならないと思うのです。

子どものころからの「ガーデンスタート」

有山 オープンガーデンがここ何年かの間に盛んになってきて、ネットワークができてきた。聞いてみますと、最初は自分の庭だけをきれいにすれば本人は満足だったのですが、だんだんそういう横のつながりができたことで、周りや隣との関係が気になり、まちづくりを意識するようになってきたというのです。

そういうところを見れば、小さいときから自分の身近に自然や庭の緑があることがすごく大事だと思うのです。小さいときに絵本を読み聞かすことで子供の情

操を育もうとする「ブックスタート」みたいな発想で、「ガーデンスタート」と言っているのですが、小さいときから庭づくり、草花とか土に触れ合うようなことをむしろ強制的にやることも必要なのではないかと思います。そういうところから芽が出てくるような気がするのです。

八木 百年計画ですね。

小林 庭をつくりお互いに情報交換することで、マイルドとか、求めているエデンみたいなものを共通にしているのではないかと思います。今のガーデンスタートの話も、庭をつくるのが目的ではなくて、つくりながら何かを学び、心に秘めているものを地域で共通にしようよということではないでしょうか。見える資源づくりと見えない資源づくりを皆さんはやろうとしているのだと思います。それが街の中でできないというのがつらいところです。

3 今後の展開に当たって

先人の造ってきたものを成熟、発酵させる

小林 ガーデンアイランドへの道程は息の長い仕事ですよね。建築も土木もそうですが、つくと維持はありますが、仕事としては一応終わりです。しかし、庭とか里山はつくったときが始まりみたいなところがあります。北海道には里山の文化がないということですが、先人たちがつくってきたものを維持しながらうまく成熟させたり発酵させたりすることが2世紀目の北海道かと思っています。

そのときに、皆さんはかかわっている方にどんなビジョンを投げかけたり、思ったりされているのかを少し長いスパンでうかがえたらと思います。

多様な生き物が生存できる環境をつくっていく

有山 植物や自然を取り入れることで豊かな生活にしていこうという考え方があります。もう一つは、ガーデンアイランド運動と環境との関係性をもう少し説明できなければだめということです。たまたま釧路方面で活動しているグループがいて、釧路は霧があって園芸植物が十分育たないという面もあると思いますが、道東は自然の植物をもっと守って、再生させることが大事だと自然を復活させる運動が起きつつあるのです。

外見景観の緑のボリュームアップの要素もあるのですが、景観の質という意味で多様な生き物が生存

できる環境をどうつくっていくか。今の自然もよく見ると生態的にはいろんな外来種が入ってきて非常に劣化している。それを戻さなければいけないという意識が結構あると思います。そういうところは百年の計で、元々天然の自然を持っているのですから、それを守るのももちろん、より元のいい状態に戻していくことを私たちの運動の中では取り上げていきたいと思っています。

野の花回帰!

八木 それはすごく大事なことです。「ビズ」の50号



の「十勝千年の森」の特集取材に「野の花回帰」というタイトルを付けたのですが、その言葉がすごく受けたのです。今の有山さんのお話に拍手です。クマザサを何回も刈っていったら、そこからいろんな花が生まれ、それをさらに種を採って増やし、あるいは野生のスズランをいっぱい増やすといった、北海道に野の花を増やしていく動きが既に実現に向かって始まっているというところがすごくいいと思いました。日本人は野の花へのあこがれがすごく強い、ナチュラル志向の強い民族だと思いますので、その辺はとても大事です。

日本庭園とイングリッシュガーデンの違いは何かというと、それは花があることです。観光として、あるいはまちづくりで、心を動かすキーワードに花が大切という、「花を心に」みたいなところはガーデンが育んだ意識だと思いますが。



かとう 私も以前「花新聞」の編集長をしていたとき、「山野草」というタイトルをつけた途端に売れ行きがよくなったことがありました。山野草で年に2回特集をしていました。落ち着くとか懐かしい花に対するあこがれが強い人が多いということですね。



利尻・礼文は花の浮島です。本州では高い山を歩かないと見られないものが、平地にあります。そういうあり得ない、ここにしかない景観が結構島にはあります。花のピークは過ぎていましたが、去年9月に礼文・利尻に行きました。礼文では緑の質感がすばらしく、ニュージーランドのようなコケとかシダの世界。緑と海しかないのですが、乾いていた心がしっとりするような感じ。宗谷丘陵も何もなくても緑のみずみずしさと心が感動であふれることを感じました。

これは、東京や大阪などの空気の悪いところで忙しく仕事をしている人が、2週間、3週間と北海道に来て、体や心を直して戻っていくような「癒しの大地」になれると思いました。現に「北海道で人間ドックをして帰ろう」ツアーがあるのです。北海道は大きくて、広くて、豊かな大地だということを誰かがもう一度大きな声で言わないとそのよさが伝わらないかもしれませんね。

人がかかわれる森をどれくらい広げていけるか

高野 植林は地球環境の保全に必要だとよくいわれていますが、環境とのきめ細かなやりとりを楽しみながら継続的にやらないとだめではないかという気がします。先ほどの有山さんの話のように、小さいうちに本当の意味で自然とか森と触れ合って、こんなに気持ちがいいのだというのを体験することが、次世代にとってはすごく大事だという気がするのです。

道のない森に子供を入れるというのは意味があります。自分の意思で一步を踏み出さなくてはいけないわけです。環境を読んで、意思を決定して、第1歩を踏み出す。そうした道のないところでも自由に行ける気持ちのいい森があることは、意味のあることです。

北海道は森がたくさんあるといわれていますが、実際はクマザサだらけで行けない。本当に大事なものは、人がかかわれる森のエリアをどれくらい広げていくかということです。あとはほっておいても、長い自然の遷移の中で、100年、200年の間には自然度の高い森に

どんどん遷移して行きます。

最近「修景林施業」という言葉を使っているのですが、何年でどのぐらいの成長量というような林業的な視点で森を施業するのではなくて、針葉樹の濃い緑と広葉樹のモミジの美しさをどういう比率で交えたらきれいになるかという視点で森を施業していけるといいなと思っています。

百年計画は人を育てること

八木 今年9月にドイツのクラインガルテンを取材したとき、「このクラインガルテンでうちの子供たちは小さいときから遊んで育って、今はみんな家庭を持っているのだよ」とそこのおじいさんがいうのです。ドイツのクラインガルテンは永遠に代々受け継いでいける貸し農園なのです。花や野菜、果樹を育てながら、かわいくペンキを塗った家の中でお茶を飲んだり、友たちと話をしたり、子供たちをその辺で遊ばせながら、自分たちの毎日の生活を次に受け継がせる。ガーデン体験、土から物を考えることが、自分たちの環境を大事にしていく気持をつくり、共通した意識を共有することにつながるのだと思うのです。ですから、百年計画とは人を育てることだと思います。

資源の循環が「地域の習慣」に

小林 どれだけ地域を大事にする意識と力を持っているか、それをどう次の世代に伝えていくかという場を持っているということは、地域に力があるという話です。日本全体を見たとき、地域を育てていくという力がどんどん欠けてきています。皆さんは、今まで存在してきた自然や公園、道路といったものを使いながら、いかに地域の人たちの力でもう一度地域の魅力を発見して、地域の力に置き換えていく仕組みをつくっていくかということにチャレンジされているという気がします。

八木さんが野の花をキーワードにしたとき、日本人が短歌などに盛り込んだ文化を花の向こうに感じる、そういうものが日本人の血としてあるから、魅力を感じるのだと思うのです。同じように北海道も、野の花も、山も、大自然もそうかもしれない、何かそういう文化を共通に感じながら、それを利用しながら、若い世代、次の世代を育てていく。

これまでは、社会のインフラを見えるようにつくっていくと、地域がブラッシュアップされて力がつくように思っていました。どうやって維持するか、使うかが重要であって、見えないものを同時につくっていく

くということがなかなかできなかった。

長野の諏訪大社に「御柱」というのがあります。山の木を育てる人がみんなで頑張っていて、うまく育ったから12年に一度、地域の人たちで神社の隅に立て聖なるものになる。それをみんなで山から引き出し、街のなかを引っ張って、諏訪大社の御柱として建立するお祭りになっているのです。私はそれを見て資源の循環をしているのではないかと思いました。作法としてしなければならないことを、楽しみながら地域の習慣にしています。

北海道でそういう習慣を体験できるお祭りが出来上がるとすごく魅力があるものになります。シーニックバイウェイに私が期待するのは、「エデンなるもの」をみんなでつくり上げ、シーニックバイウェイとお祭りがクロスすると抜群に面白くなると思うのです。

土地の持つ力を引き出していく目

高野 北海道の魅力の一つとしてリゾートがありますが、最近、ある雑誌から取材を受けてそれが結構面白いテーマなのです。リゾートのマスターデザイナー、マスタープランナーがランドスケープアーキテクトのプロジェクトが最近増えていて、それを特集する取材です。今まではどちらかといえば、ランドスケープアーキテクトはホテルができたなら周りに植栽をするというパターンの参加が多かったと思います。特にバブル期では施設での勝負でした。ところが、今一番の魅力は周りにある自然であり、体験でありといったときには、私たちはその土地の持っている力を一番うまく引き出していける目を持たなければなりません。逆に言うと、そういう期待が出てきたときに、単に木を植えるだけではなく、こういうのはこういう層に戦略的に的確にアピールできるのではないかと、第1段階はこのレベルの展開を、次のステップではこの展開をというようなことが広く要求される時代になってきたという気がします。

小林 そういう企画は高く評価したいですね。

高野 あまりお金を掛けずに高く売れるという感じ。これからのプロジェクトはまさしくそういう傾向かと思っています。

買いたたかれない観光・北海道に

小林 本日の座談会のタイトルにもてなしの心でつくる北海道百年の景観」とあります。今はみんな、農村

も農業も景観も自然も観光だといいますが、現場を見ると使い捨てられ、買いたたかれる観光のような気がします。お金をかけ、長い時間をかけて初めて体験できるものがある。買いたたかれない北海道にするためには、どういう景観づくり、どういう景観の利用の仕方があるのか。来られた方に参加してもらい、それを維持していくようなプログラムができると、買いたたかれない農村や農業、観光としてそれを考える景観になるのではないかと。そうしたグッドサイクルができると、北海道はいろいろな可能性があるといわれているので、北海道に住もうという魅力、北海道なら投資をしたいという魅力につながっていくのではないかと思います。

「着地型ツアー」でいい旅創造

有山 旅行の形態が大きく変わってきました。以前は7割が団体旅行で3割が個人旅行だったのが、今では完全に逆転しています。また、インターネットの普及でエージェントは個人旅行をサポートする商品開発の方向に向かっています。そういう構造変化の中で北海道観光もずいぶん変わってきています。知床を見ても完全に二極分化し、従来型の低価格な団体ツアーがある一方で、質の高いツアーを体験するためのガイドさんの需要が伸び、値段的には多少高くなるのですが、非常に充実したツアーがひとつの大きなマーケットとして確立されています。

そのため、地元の人をもっと関わって、いろいろレベルの高いツアーを地元主導で企画したいという声も具体的に出て来ています。

それにどう対応していくかですが、例えばガーデンを見て、おいしいものを食べ、温泉のいいところを紹介して、木を植えるツアーを企画するというパッケージの、いわゆる「着地型ツアー」をつくる。今までは本州の人たちが企画したものにわれわれが単純に乗っかっていましたが、こういう旅をしてもらいたいというモデル的なものを逆に旅行エージェントに売り込むという発想の転換が必要だと思います。

北海道を差別化されたエデンに

小林 北海道に行くとは全然違うものが感じられる、だから行きましようという部分をみんなでつくっていかねばいけぬ。高野さんは千年の森づくりでエデンそのものをつくっておられますが、その部分を共有することが大事です。

中国人もいまアンケートを取ると、みんなヨーロッ

パへ行ってしまふ。その中で北海道が光り輝くようにするためには、やはり差別化されたエデンが必要でしょう。例えば、スイスだと山を見るとかそういうことばかりではないものが感じられてあこがれる、オーストラリアに行くともた違ふ、ニュージーランドにはまた違ふ心を求めていく。そうした何か差別化されたものが北海道にあるといいと思います。

有山 ヘルスツーリズムとか、言葉だけで北海道的なツアーを普及させるというのは、確かに難しいです。

小林 北海道的というのは何だと思ひますか。

かとう 例へば、「グッドモーニング・ラベンダーツアー」というのを2年前に企画しました。ファーム富田は夏のピーク時にはすごく渋滞します。そこで考えたのは、札幌を朝4時に出て、朝露が落ちる5時半ぐらいに着いて、香りも最高で朝露のあるラベンダーを写す。それが写真好きの人にはたまらない魅力。そこを富田さんと一緒に歩き、ラベンダーを独り占めして、富良野野菜のみそ汁を飲んで、まだ人が混まない富良野、美瑛観光をする。誰もいない時間というのも私は結構いいと思ひています。

森の中を馬で歩いて、山の上に登り、日の出を見て、ワインを飲むというのも十勝のルートではやっています。

それと、イギリス人が冬場、釧路の方に大勢集まり鳥を見ているそうです。有名な鳥の本があり、「僕は2,250種見たよ。君は1,700種だね」という世界があつて、その時期には多種類の鳥が見られる釧路に長期間滞在するようです。2週間休みを取つてきていて、まだ見られるのではないかと延泊を重ね1カ月もいる人もあるようです。知床にもシマフクロウを見るために何日間も泊まつて、見られたら帰る日本人のツアーもあると聞きました。

もう一つは、ワイナリーの中でぶどう畑でワインを飲むことです。ワインを飲みながら見る景観がよかつた。人気の高いツアーになりました。10月は富良野や浦臼に出かける予定です。

来年は朝もぎトウモロコシを自分で収穫し、その場で炭火でゆでて食べるツアーをひそかに企画しています。こういうことは、北海道でなければできないと思ひています。つまり、トウモロコシ、ジャガイモ、ホワイトアスパラを畑で食べる。「食べたかったらここに

来てやろう」みたいなことが北海道的かどうかわからないのですが…。

小林 そうそう、それが大事なのです。

有山 北海道にはいい食材がたくさんあるといわれていますが、食べ方がワンパターンです。北海道ならではの食べ方、それがもてなし方でしょう。

八木 観光の形とか、価値観を整理して、いろいろなことをつなげて、一つの北海道観光の価値観をつくっていったらいいのではないのでしょうか。私も北海道育ちですから、トウモロコシはもいだらすぐゆでなければ絶対駄目。フレッシュというところを商品につなげて、これからの旅はこうでなくては面白くないという価値観づくりをして、ハウツーをつくつて、そして宣伝をかける、このようにしたら面白いと思ひます。

森の応接室で接待

高野 今興味のある事の一つは、森にパーティーができる場所をつくることです。大きな大木を二つ割りにした長さ8メートルぐらいの大テーブルで、バーのカウンターも森の中にできているというものです。砂漠の民が一番の賓客をもてなすのは砂漠の中のテントです。街中で会議をやるよりは「おれのテントに来るか」と呼ばれたとき一歩近づくことになります。

ですから、森の民である日本人のもてなしとして、考へているのは「森の応接室」です。

八木 千年の森を訪れて、その大きな木のテーブルを見たときに思ひはわかりました。でも、いつもそこにいる高野さんと、東京から来た私が初めてシカの角が落ちていた道を歩いたときに、そこにとどまつて心地がいいかという？です。虫が来るのではないか、ダニは大丈夫かと気になってしまうのです。ワイルド



はいいのですが、女性にとってはもう一息整備してくれないと、千年の森で大自然を感じながら「すてき」とうっとりできるかといったらちょっと難しい。女性の感性でチェックを入れるのがいいと思います。

高野 森は春と秋です。夏はどうしてもダニがあります。林床の草花を育てようと思うと夏に刈るわけにいかないのです。もう少しお待ちください。(笑い)

有山 国立公園の自然再生事業の中で利用の一つとして、ただ来て写真を撮るのではなく、帰化植物を抜いたり、ササを刈るというような体験を取り込もうというのがあります。うまく取り込めば楽しいし、自分も少し貢献しているという感じもあると思います。

八木さんが「虫がいる」と言われましたが、それは北海道のよさで、北海道へ行ったら野生がまだ残っていてちょっとリスクもあるし怖いところもある。きちっと整備されたところもある。そこはうまくガイドさんが誘導してくれると思います。

八木 最近、ファーブル昆虫記を一生懸命読み始めているところです。フンコロガシだろうが何虫だろうが、ダニだって怖くなくなってしまうかもしれない。そういう学習も必要なのですね。

高野 森を楽しむのは春と秋だと思います。いろんな季節の変化があり、夏は草原のエリアで楽しめばいい。千年の森ではいろいろなレベルで楽しんでもらうために、自然の要素をテーマに7つの庭にしています。

大きな視点で都市と農村の間をつなぐことが大切

高野 おもてなしで、もう一つ大事だと思うのは、定住したいという人たちをどう受け入れ、もてなしていくかということです。街と自然との接点の田園地帯、農村地帯の中はかなり可能性があります。都市計画は市街地が基本です。農村計画は農業主体で、都市的要素が農村地帯に入っていった魅力的なライフスタイルを構築するというあたりがつながっていません。

私たちは農村集落に住んでいます。廃校になった小学校がたくさんあります。その周りに住宅を建て、隣接した農地を畑として借りて、体育館の古いのがあったらコミュニティの核にする形にして、あまり使われてない土地を安くしてあげる。その辺が行政の大事な役目で、大きな視点で都市と農村の間をつないでいくことが大切です。

北海道でしか感じられない里心を

小林 時間ができ、自然が大好きで、北海道に住みたいと思う人間のパターンは幾つかあります。4輪駆動

車で野山に入ったような気持ちでダーッと来るという者もいますが、ちょっと困っている農村に行って農業を手伝い、お祭りや行事に参加して、壊れそうなコミュニティを助けてあげようという気持ちを持っている人もいます。ですから、北海道がこういう人たちが欲しい、一緒にやりたいというメッセージを強く出すことが必要です。里山とか里川とか里海というように、私は「里心」と言っていますが、北海道でしか感じられない里心があって、みんなで共有しようというメッセージを強く出すことが、来る人を呼び寄せる里心、隠れている里心を突っつくことになると思います。

ゴルフ場のそばに住んで毎日ゴルフをやれたら

高野 ゴルフ場の周辺にまだ残っている森に少し手を入れたら気持ちのいいものになり、近くに小川が流れていて、コテージを建てる可能性があります。北海道に移住するのはアウトドア派か、農業を好む人が主に語られてます。しかし、私が頭に浮かぶのは、ゴルフ大好き人間。企業戦士としてずっとゴルフをやってきて、退職したらゴルフ場のそばに住んで、毎日ゴルフをやれたらこんな幸せなことはない。おまけに畑もあって、森も近くにあると。見方を変えていけば、結構な楽しみを用意できて、おもてなしできるという感じがします。

北海道でなければできないライフスタイルを

小林 都市と農村を一体的に考えていく法律をつくらうとしたときがあるのです。2000年よりちょっと前。首都圏の政治家たちが大反対で法律ができなかったのです。それをぜひ北海道でやってほしいということが、法律作成に失敗した方々の希望なのです。北海道でなければできない住み方とかライフスタイルを、法律を少し読み替えることによって担保してあげることができると思っています。



高野 本州の都市周辺では変な開発が入ってきたら困るから、農村、優良農地を守る法体制ができています。北海道はいろんなエネルギーが入ってきてもらう方が活性化していきますし、それを受け入れるだけの余地は十分あるところです。

八木 今日、千歳から札幌まで電車で来たのですが、沿線の景観としては、アスファルトの上に直接載っかっているみたいな家がすごく多いのです。おまけに

こんな広い大地があるのに、隣とくっついて東京みたいな建て方をしているなと思いました。ベルギーの郊外はどこを走ろうと、家の周りは豊かな緑があり、程よい人口密度の田園地帯が続きます。私が小さいときは、札幌市郊外の琴似に親戚がいたので、しょっちゅう小樽から遊びに行っていたのです。サイロがあって、バターの香りがして、異国情緒のようなものを子供心に感じていたのですが、そういう田園風景が完全になくなってしまいました。もう少し家の周りは空けたらいいのと思います。そういう景色だったら何度でも見に行きたい。

高野 帯広ぐらいの都市だったら、真ん中の移住したい人が十分通勤圏のところに移って行って、都市の中の空いたところがコミュニティーガーデンになり、いろんな緑のスペースが入ってまちも豊かになる。コンパクトシティというよりは、コンパクト・スモールビレッジが周辺にたくさん出てくるのがいい。

小林 自然に負荷を掛けないとか、エコロジカルフットプリントが小さくなるような住まい方を。それで幸せを感じる、そして幸せをつくるために働くことができる、そういうことを体験できるのがコンパクトシティだと思います。だから、大阪で考えるコンパクトシティ、東北で考えるコンパクトシティ、北海道で考えるコンパクトシティはそれぞれ全然違う。

有山 結局、どんどん農村コミュニティーがなくなり高齢化して仕事も減っています。そういう現状の中で、景観づくりとコミュニティーの再生をどう結び付けていくかというところで、高野さんが活動されているのは大事だと思います。それをもっと普及させることが必要ですが、今の行政の動きはそうなっていません。いろいろなまちづくりのお手伝いをするときに思うのは、第三者がいろんな形で仕掛けたりする間は動くのですが、そのあとに地域の自主的なコミュニティーがどうつくられていくか、いつもそこで悩んでいるのです。

光景と風景と情景の3つがそろって「景観」に

小林 「景観」をテーマにするとき、美しいもの、整ったもの、秩序ある街並みをつくるなど、いわゆるトンカチ部隊の景観を考えがちです。ヨーロッパの小都市や農村へ行ってみると、小さい村なのですが、おばあさんやおじいさんたちが生き生きしているのです。何でそうなのかと思いました。そして、景観は、光景と風景と情景で成り立っていることに気づきました。「光

景」は太陽が出て、沈んで、月が出て、雪が降って、季節風が吹いて、紅葉になって山の色が変わる、と毎年繰り返される。「風景」はそれと人とがどう共生しながら、街や村などに建物をつくり、活動の場をつくるか。うまいつくり方、使い方や育て方を本当にしているかどうか。「情景」はその中で子供たちが楽しげに育っているか、お年寄りの居場所があるか。その3つがそろってはじめて、「景観」なのです。

限界集落の活性化を考えると、物だけで景観をよくしても人は何もしない。だから情景、金を稼げるとか、お年寄りが生き生き生活できるものをつくる結果としていろんなものにつながっていく。四国の川勝町でおばあちゃんたちが2,000万円稼ぐ葉っぱビジネスがあります。葉っぱで私は2,000万円を稼げるのだから、子供たちも出ていかないで稼げるようにしようと、価値のある葉っぱの木を植え始めた。そうすると町がずいぶん変わった。田んぼも畑も変わった。結果として緑が増え若者も増えた。

だから、3つのことを考えると幾つかの入り口がある。それが3つそろって、「ここしかないよ」と言ってあげるのが北海道の景観かなと思うので、シーニックバイウェイではぜひ3つセットでやってほしいと思う。

花が地域のコミュニティーを復活する大きな要素に

有山 清里町は花のまちづくりが有名で農林水産大臣賞を取っていますが、ある人が行って見たときに、子供が花殻摘みをしていたのに感動したということです。また、遠軽町に太陽の丘というのがあり、すごい面積のコスモスが植わっているのですが、地元の自慢は地域の人が草取りと花殻を摘むということで、例えば野球部の生徒が野球の格好をしながら帰りに来て何となく草を取っていたりして、とにかくすごいパワーだということです。ですから、花もそういう形で地域のコミュニティーを復活する大きな要素になることは間違いないと思います。



お年寄りの居場所が「情景」に

小林 なかなかいいなと思う情景を発見しながら見ていると、お年寄りの居場所がまちの中にある。お年寄りの居場所をつくってあげるのが花かも、里山を維持することかもしれないと思うのです。中国語で言うと「老」はクオリティーが高いという意味です。そうい

う人たちが地域に顔を出せると、地域のコミュニティーにつながっていくのだらうと思います。お年寄りの居場所をつくってあげることも含めて、先ほどお話しした景観の3つのシナリオで生活と結びついた景観をつくることにつながるのです。

八木 オープンガーデンの大きな組織ができて、今年でちょうど10年なのです。孫、お父さん、お母さん、おじいちゃん、おばあちゃんの3世代が一緒になってそれぞれの友だちを呼び、オープンガーデンの日には、おばあちゃんたちが次の若い世代たちと一緒に縁側に座って、あるいは庭で説明したりする。孫は駐車場への交通整理をしたり、家族そろって世代を越えて一致団結して庭をオープンするという話を聞いたとき、本当に私はガーデンをやってよかったと思いました。

小林 北海道に行くと、そこしかない、心地よい場所でおいしく安全な食べ物を食べられて、高齢の方々も、街なかや農村にきちんと居場所が見つけられて、経験を生かして地域貢献もできて、道路ネットワークを利用して、シーニックバイウェイの情報を頼りながら北海道で全然違う感動と居場所をまた見つけるという、連携の豊かさへの可能性の存在をが感じられました。その中で北海道の里心をみんなで作って共有し、エデンとする皆さんのお話をうかがいながら実感しました。

心のオーガニック

八木 忘れていただきたいのは、北海道のオーガニックなイメージです。雪印やミートホープの偽装事件は、北海道にとってはすごいダメージでしたが、それは大事にしてください。

小林 外のオーガニックもありますが、心のオーガニックというのもあるのではないのでしょうか。

八木 すべてにおいてそう思います。ピュアで、伸び伸びしているという北海道のイメージがあります。

小林 それがエデンなのです。

八木 そう、まとまった。(笑)

有山 本州から来る人に聞くと、北海道のイメージのかなりの部分が食べ物にあって、食べ物は自然の中から出てくるものだから、北海道はすべてがおいしく感じるということ言うのです。私たちから見たら別にどうということはない。案外、外からはそんなイメージがある。それがエデンなのかもしれないですね。

(本座談会は、平成19年11月14日に札幌市で開催しました)

profile

小林 英嗣

こばやし ひでつぐ

1946年長野県生まれ、北海道育ち。'71年北海道大学大学院工学研究科修了。'86年同大大学助教授を経て、'95年同大大学院工学研究科教授。日本建築学会理事、日本都市計画学会理事、北海道都市計画審議会会長等を歴任。現在、中国同済大学客員教授、ロシア国家企画庁アドバイザー、NPO日本都市計画家協会副会長などを兼務する臨床都市計画家。専門分野は都市地域デザイン。都市再生やまちづくりの領域で臨床学的に行動・研究活動を展開。「北海道都市計画マスタープラン」「北海道景観形成計画」「札幌都心まちづくり計画」などに関わる。主な著書は「都市と建築」「安全と再生の都市計画」「公共事業は誰のものか」など。

有山 忠男

ありやま ただお

1951年小樽市生まれ。'73年北海道大学農学部農学科卒業。'73～'82年(社)日本観光協会勤務。'82年北海道にUターンし、'83年ライヴ環境計画設立・入社、'94年同社代表取締役社長就任。2004年よりガーデンアイランド北海道2008事務局。このほか国土交通省地域振興アドバイザー、わが村は美しく北海道運動コンクール審査委員、北海道環境審議会専門委員などを務める。

かとう けいこ

1963年北海道足寄町生まれ。放送局、広告代理店などを経て、消費生活アドバイザーとして北海道経済産業局消費者相談室勤務。2000年1月～'06年3月まで「花新聞ほっかいどう」創刊編集長。'06年5月より現職。(社)北海道造園建設業協会理事、産業観光検診委員など公職多数。中2、小6の2児の母、札幌市在住。

高野 文彰

たかの ふみあき

1944年中国天津市生まれ。'66年北海道大学農学部卒業後、アメリカ、ジョージア大学にて環境デザインを学ぶ。現在、高野ランドスケーププランニング(株)代表取締役。マレーシア、台湾、フランス等で広くランドスケープ全般に関わる仕事を展開。18年前に東京を離れ十勝、音更町の旧小学校を拠点としてデザイン、森づくり、参加型のプロセスを軸に活動を展開。

八木 波奈子

やぎ はなこ

1946年小樽市生まれ。'69年東京芸術大学卒業。同年婦人生活社に入社。'82年インテリアと手づくりの生活誌「私の部屋」の編集長となる。'92年ホーム&ガーデン誌「BISES(ビス)」を創刊。'97年「ガーデニング」がこの年の流行語大賞ベスト10に入り受賞。'98年有限会社ビス出版設立、代表取締役となる。編集長歴25年。ファッションからスタートしたその経験の領域は、インテリア、建築、ガーデニングなど広くライフスタイル関連に及ぶ。特に、一般女性のインテリア、パッチワーク・キルト、ガーデニングの領域をパイオニアとして発掘取材・育成し、後続の女性誌界の主要テーマとさせた。